

# 精神的未成熟と「男性性」

—Sherwood Anderson の *Horses and Men*

渡 部 知 美

短篇集 *Horses and Men* (1923) は、「シカゴ・ルネッサンス」の衰退、商業主義の蔓延の中での作者 Sherwood Anderson の厭世的気分が反映されていると指摘されている。しかし、アメリカ中西部の人々の生活を、地に足の着いた立場から見ていこうという彼の姿勢が感じられる。David Anderson は、冒頭の“Forward”、Anderson を文壇に登場させようと努力し互いに尊敬し合っていた Theodore Dreiser に捧げられた短文、類似したテーマで田舎と都会を背景にした短篇がペアになっているという構成に、一つの纏まりのある短篇集にしようという作者の意図を読み取っている (Anderson 96-97)。

Dreiser への献辞において、Anderson は、“In whose presence I have sometimes had the same refreshed feeling as when in the presence of a thoroughbred horse” と述べている。Anderson は、“Horses and Negroes seem to be the two things in America that give me the most ascetic [sic] pleasure” (Jones 101) と述べている。レースが始まるまではじっとしている馬に、自制をしている者が持つ身体的・精神的美を見出し、そこにさわやかさ、さわやかなものを見る喜びを感じていると捉えられる。

1920 年に書かれた“Dreiser”と題する短文において、孤児院の孤児達を目の当りにして、言葉もなく涙を流す Dreiser の姿を語った後、Anderson は次のように述べている。

He is old in spirit and he does not know what to do with life, so he tells about it as he sees it, simply and honestly. . . .

The fellows of the ink-pots, the prose writers in America who follow Dreiser, will have much to do that he has never done. Their road is long but, because of him, those who follow will never have to face the road through the wilderness of Puritan denial, the road that Dreiser faced alone. (xii)

*American Tragedy* (1925) 出版以前で、Dreiser への酷評が多い中、Anderson は Dreiser の作家としての本質を捉えている。Anderson は Dreiser に、Puritanism 批判は「お上品な」中流階級読者層から社会的規範に挑戦するものとして非難される時代にあつて、世間の道德から外れざるを得なかった人間の姿を誠実に語る勇氣ある姿勢を見出ししている。

さて、本作品の背景は 19 世紀末から 20 世紀初めと考えられる。南北戦争の頃まで支配的だった観念形態の一つは、市民の経済的自立を重視するもので、農業や商工業、知的専門職であれ、独立の自営業者になることが、ほとんどのアメリカ白人男性にとって、追求すべき理想であつた(常松 38)。Gail Bederman は、19 世紀のアメリカにおいて、自立と自己抑制が、「男らしさ」(manliness) の指標となつていったと指摘している(小玉 99)。貧困は真面目に働かないため、貧しい人間には道德的欠陥があると考えられた。<sup>1</sup> しかし、産業化・都市化の急速な進展、産業構造の変化により、19 世紀末には中流階級の多くの白人男性は賃金労働者となつていく。拡大する消費文化の中で、儉約や禁欲といった自己抑制は、生産活動とも、余暇や楽しみの追求とも相容れない。共和国の理念、そして、「男性性」も再構築する必要を迫られる。後者に関しては、神経衰弱や性的倒錯という病気について論じられるようになったことも、その要因の一つである。Bederman によると、新しい「男性性」を表す用語として“masculinity”が登場し、1930 年頃までには、攻撃性・肉体的強さ・性的能力など、20 世紀のアメリカ的な意味での「男らしさ」を示す言葉として定着していく。ただ、20 世紀初頭にはまだ、manliness と masculinity との両方が、「男らしさ」の基準として共存している(小玉 99-100)。

本論においては、主に馬が登場する“*I'm a Fool*”、“*Unused*”、“*The Man Who Became a Woman*”、“*An Ohio Pagan*”を取り上げ、男性性に注意を払いながら、タイトルに込められた意味、本短篇集を貫くテーマを考察する。

## I

本短篇集の最初的一篇“*I'm a Fool*”の語り手“I”は、二度とつかめないような素晴らしいチャンスをふいにしたのは身から出た錆であると理解し、自身の愚かさを落ち着いて見つめている。馬丁という職を、母親や妹からも恥ずべきことと思われ、涙や言葉で彼は非難される。特に妹は、家族にそういう職業の者がいることは、教師の職を得る上で障害になると思つているのだと、彼は

語っている。父親のいない下層中流家庭で、男として腑甲斐ないと思われていることを、彼は分っている。しかし、彼は、馬場での生活を経験したらその素晴らしさが分るし、世間の人間の競馬場関係者への見方は、偏見であることを語っている。だが一方で、“You can stick your colleges up your nose for all me. I guess I know where I got my education” (6) と語っており、教育があまりないということに関して、彼は身の程を弁えている。客観的で公正な判断ができるのであり、彼は自身のそういう面を、語りにおいて示している。また、上流階級の人々の社交場でもある正面観覧席に坐ることと、馬丁であることにに関して、彼は次のように語っている。

I liked one thing about the same as the other, sitting up there and feeling grand and being down there and looking up at the yaps and feeling grander and more important, too. One thing's about as good as another, if you take it just right. I've often said that. (8)

彼は、職業に貴賤はないと考えてきたのであり、自分が馬丁をしていることに引け目を感じたことはないのである。

その彼が、正面観覧席で知り合った若者達に、父親の職業、そこに来た理由、住所、自分の名前についてさえ、嘘をついてしまう。その三人の名前の響き、仕立てのよい服装、彼を見て顔を赤らめた娘の恥ずかしげな目の表情が、彼の気持ちを揺さぶったのである。その娘 Lucy Wessen は、流し目をするような蓮っ葉な娘ではなく、自分の妻にしたいと男が思うような慎ましやかな娘であると、彼は語っている。

There's a kind of girl, you see just once in your life, and if you don't get busy and make hay, then you're gone for good and all, and might as well go jump off a bridge. They give you a look from inside of them somewhere, and it ain't no vamping, and what it means is—you want that girl to be your wife, and you want nice things around her like flowers and swell clothes, and you want her to have the kids you're going to have, and you want good music played and no rag time. Gee whizz. (15)

道徳的規範の堅苦しきから解放される馬場での自由で伸び伸びとした雰囲気が好きだった彼が、上層中流階級の Lucy との結婚生活を夢に見始めているのが分る。従って、Lucy が文通をしましょうと言った時には、彼は “I got a chance like a hay barn afire. A swell chance I got” (17) と思っており、天にも昇る気持ちだったと感ぜられる。しかし、彼は、Lucy が自分に好意を抱いてくれたのは、自分の父親が大きな煉瓦の屋敷に住む馬主でというような理由ではないことは、彼女と一緒にいて直感的に分ると、語っている。嬉しければ嬉しいだけ、嘘の取消しようがなく、彼は屈折した悲しい気持ちを抱いていると思われる。自分を偽った彼を、彼女が受け入れてくれるとは思えないのである。

語りながら、彼は、次第に過去の自分との距離感を喪失し、地団太を踏んで悔しがっている。自分が愚かな真似をする切っ掛けとなった、ステッキに蝶ネクタイ姿の気取った男を責めても、彼の気持ちは治まらない。自分から得意気に話したのではなく、口火を切っただけと彼は自己弁護をしている。しかし、自己弁護をしても慰められない。自身に対する皮肉、自嘲のトーンは次第に高まり、終いには愚かな自分を客体化し、呆れ、見放している。彼は、見栄を張ることを中流階級の嫌らしさとして軽蔑していたのにもかかわらず、それを実践してしまったのである。故に、自身の愚かさを悔いると同時に、容易に足をすくわれた自分に腹立たしさを覚えているのである。それは、彼が自身の一時の間違いを許せないくらい、精神的に潔癖であることを、物語っている。<sup>2</sup>

“The Triumph of a Modern” の自称モダニストの語り手 “I” は、偶然病気であることを知ったおばに、手紙を書く。おばには一度も会ったこともなく、彼は彼女の病状を心から案じている訳ではない。手紙書きに熱中し、逆境の中、おばの胸に安らぎを求めている孤児のような存在として、彼は自分のことを書いている。そして、“bosom” (25) という古めかしい言葉の代わりに、「身内の年輩の女性にしか使わない表現」“breasts” (24) を使うことで、彼女に自分が親密感を抱いていると感じさせている。そして、David Anderson が指摘しているように、一人暮らしをしてきたおばの “repressed maternal and sexual instincts” に訴えることに成功をする (Anderson 97)。こうして、彼はおばの遺産をまんまと手に入れる。手紙を投函する時、投函を取り止める気持ちなどないのに、投函すべきか否か迷う振りをしながら、“artists are always talking of destroying their own work but few do it, and those who do are perhaps the real heroes of life” (26) と思っており、彼は自分がえせ芸術家であることを認めて

いるのである。自身の表現の巧みさによって大金を手に入れたことを得意になって語りこぞすれ、おばをだましたという意識さえ、彼は抱いてはいない。

価値観、人生観の揺れを見せた“*I'm a Fool*”の語り手、語ることで自身の卑しい根性をさらけ出していることに気づいてさえいない“*The Triumph of a Modern*”の語り手に、Andersonは精神的未成熟を見ていると考えられる。

中篇とも言える“*Unused*”は、少年だった語り手を、子供扱い、使用人扱いせず、ひとりの人間として扱う態度で、医者が語ってくれた話の断片と、自身の人生経験とから語り手が理解するに至ったMay Edgleyの物語である。

Mayは、自分の家族が“*cattle*”(70)と蔑まれながらも、学校での抜群の成績故に、自身は田舎街Bidwellの人々から一目置かれていることを知っている。しかし、話しかけてもらえても孤独であることに変りはなく、Bidwellの町の生の流れの一部になりたい、人々と親しくなりたいと思っている。従って、生活費を稼ぐために出かけて行った苺畑で、自分に屈託なく話しかけてきたJerome Hadleyと森へ行く。男性への興味、町の人々への挑戦的な思いも働いていたと考えられる。だが、無理矢理、体を奪われたのであり、Mayにそういう意図はなかった。苺摘みは、若者達が異性と知り合ったり、ふざけ合うための場でもあるが、それ以上の深刻なことがあってはならないとされている。従って、世間は、Jeromeを誘うかのように先に立って森へ向かったMayに、苺摘みの精神を誤解した責任があるとし、彼女の姉LillianやKateと同様に、売春婦に堕ちた女としてMayを蔑視する。一方、Jeromeは、初めからMayを誘惑するつもりで、他の若者達に目で合図をして彼女に近づいている。そして、彼女を落としたことを彼は、彼らに自慢する。ここに、家父長制社会における男達のホモソーシャルな関係の片鱗を見ることができ、<sup>3</sup>世間の道徳的規範から逸脱した家の娘は、遊び相手でしかないという暗黙の了解が、男達の間にあると思われる。

心身ともに傷ついたMayは、家事に精を出したり、自宅近くの柳とにわとこの茂みの中でひとりで過ごすことで、痛ましい記憶と冷たい世間の目から逃れようとする。そして、病弱で外の世界をほとんど知らないMaud Welliverを相手に、Jeromeとの一件を事実とは異なるサスペンス風の物語に仕立てたり、ある国の王子様と自分が婚約するに至ったという物語を紡ぎ出す。空想の世界“*tower of romance*”(131)に閉じこもることで、Mayは自己防御をしようとするのである。現実に向き合おうとしないのである。Sid GouldがMayに手を出

そうとしたことは、彼女にとっては、Jerome との一件の再現であり、男の恐ろしさ、世間の恐ろしさをまざまざと彼女の中に蘇らせる。故に、May は、Sid から逃れようとして、Jerome という姿をとって最初に彼女を誘惑したのと同じような “deceptively strong current” (Taylor 60)、即ち、浅瀬から急に深くなっている水の流れに身を任せてしまう。

少年の頃、May の水死体を見て、初めて、死というものを経験し怯えた語り手は、体を通して感じた馬屋の干し草の暖かく心地好い臭い、老馬の体の温もりによって、心に生の暖かみを取り戻していると思われる。この時、傍らのその老馬が、“Death is a kind of comforting thing to those who are through with their lives” (34) と語りかけているように感じて落ち着いたと、彼は語っている。だが、この言葉に含意されている、人間の生は、死ぬことより辛いものになりうるというのは、語り手が抱くに至った人生観、世界観でもあると捉えられる。

豊かな人生経験故の知恵、偏狭な道徳観の犠牲者への憐憫の情は、Anderson が Dreiser に見い出していたものであると考えられる。

## II

Sid が May をものにしようとしたのには、Edgley 家への腹いせも動機の一つである。一方、“The Man who Became a Woman” の語り手 Herman Dudley は、そのタイトルが暗示するように、自分の欲求を強引に満たそうとする野卑な男ではない。Herman は、妻 Jessie との結婚生活に一応満足している大人という位置から、今でも時折蘇る悪夢について語る。馬丁をしていた頃、彼は、作家志望の Tom Means と過ごすことで、同じ心の波長で相手と震え合えるのを感じ、精神的充実感、生の充足感を得ていた。作品を書くことや馬について熱を込めて語る Tom が、Herman の中の想像力の働きを活性化させるのである。専ら、高層ビルや工場建設、機械による商品の大量生産という現実的・経済的な目的のために、人間の知性、想像力、エネルギーが必要とされた時代にあって、“pest” (XIV 14) として蔑まれた、美しく繊細なものの価値の分る詩人のような心を、彼にもたらしてくれたのである。

Tom が馬場を去ると、彼との親交の中で昇華されていた性的欲求が Herman を悩ますようになる。白人なら、その勇気さえあれば女に不自由しないのに、声をかけることすらできない。レースを見ている時以外は、何にも夢中になれ

ず、仕事は手に付かないし、食欲もない。この頃の自分の状態を彼は“all around you the life of the place you are in is going on, and in a queer way you get so you aren't really a part of it at all”(198)と語っており、彼が現実世界とのつながりを感じれないでいるのが分る。この世に存在しないような美しい無垢な娘を心に思い描き、彼女の前では男らしく振舞える自分を空想をし、現実離れした空想の世界に浸っている。従って、現実との接触を持たず、自分の内的世界に沈み込んでいることからくる寂しさ、現実に対する怯え、自分の中で停滞し淀んでいるような生気の無さを感じざるを得ない。故に、彼は、男であることに自信が持てず、自身の男性らしさの無さに不安を覚えているのである。しかし、彼が売春婦まがいの女に手を出せないのは、彼が繊細な感受性の持ち主だからでもある。そのことが意識化されていないために、後は、自身の男としての腑甲斐無さを痛感して、物憂さそうにふさぎ込んでいるのだと考えられる。こういう心的状態が、彼の顔を、青白く、怯えた女の子の顔に見えるくらい自信のない表情にしたのだと思われる。

炭鉱町の汚い酒場のカウンター奥のひびの入った鏡に映った自身の“a girl's face, and a lonesome and scared girl too”(207)のような顔に、Hermanは驚愕し怯える。その衝撃からまだ立直れない彼の目の前で、人間社会の恐ろしい場面が展開される。子供を抱いて入って来た赤毛の大男を、坑夫達が、彼が気が変だと噂されているために、からかい始める。“turkey-cock”(212)と喩えられた坑夫は、臆病であるが故に、却って強がって、ふんぞり返って歩きながら、大男に対する皮肉を飛ばす。自分が笑われているのではと最初思っていたHermanは、その大男に同情していると感じられる。しかし、大男はその気取り屋を気絶させ、重い長靴を履いた片足で、彼の肩を踏みつける。骨が砕ける音がする。この大男は興奮もしていず、その暴力を正当化する怒りや憎しみも抱いていないかのようなのである。Hermanは、人間が秘めている残酷さ、卑劣さ、無情性、非情性、男の狂暴性を、痛感せざるを得ない。

自分が世話をしている馬 Pick-it-boy の傍らで、幾分心の平静さを取り戻し寝ている Herman の白い裸体を、二人の黒人男が女のそれと見間違え、彼を襲う。それは、“their mistaking him for a girl reinforces his earlier fantasy of seeing himself reflected as a female”(Taylor 66)と指摘されているように、客観的にも自分が女と映っているという事実を、彼に突きつける。闇の中を狂人のように走りながら、自身の男性らしさの無さ故の恐怖感から、彼は逃げようとしているので

ある。

精神的充実感を求める潔癖さ故に、現実から遊離した空想の世界に埋没していることの必然的結果が、“forbidden homosexual fantasy” (Howe 110) である。<sup>4</sup>しかし、屠殺場の廃屋で、あおむけに横たわっている馬の白い肋骨に自身の白い裸体がすっぽり包まれ、手には白い骨を握っているという光景が時折蘇るということは、“cold sexuality”、即ち、男性との精神的充足感の得られる関係への志向が、まだ彼の中に残っていることを暗示している。Jessie は、妻として、女としての役割を果たすから、彼女との結婚生活は破綻せずに済んでいる。だが、白骨化した馬との抱擁という夢は、統合できない彼のもう一つのセクシャルな部分があることを意味している。女の排除、去勢馬 Pick-it-boy の体を撫でた時に覚えた官能性、触覚を通しての性的快感は、彼の男性との純粋な関係への志向が、ホモ・エロティックな関係への性向に限りなく近いものであることを感じさせる。彼の悪夢だという意識は、忌避する気持ちが働いているからであり、自身の中にホモ・エロティックな関係への性向があることを、彼は感じていると捉えられる。故に、男としての自己のあり方に、不安を覚えているのである。

Anderson は、この炭鉱町に、20世紀初頭の工業都市の光景を重ね合わせている。石炭は当時の工業の動力源である。巨人の歯のように並んだコークス窯、坑夫達が押し込められた“hellholes” (206) と表現された醜悪な家々。アメリカの大都市の工場街に吸収された貧しい移民達は、劣悪な環境、悪臭・腐臭を忍んで、感情のない機械のようにただ働くことが、生きる術であった。<sup>5</sup>アフリカ系アメリカ人、19世紀後半から数を増していった南欧・東欧系移民、帝国主義的進出により発見された植民地の原住民。アメリカのアングロ・サクソン系白人男性は、彼らに対して、「文明」を盾に、自分達のヘゲモニーを確立しようとする。人種の優秀さが「男性性」に結びつけられたのである (小玉 100-101)。従って、白い裸体が白い経帷子に包まれているかのようなゴシック的図柄は、アメリカの開拓、発展の動力源となった多くの人々を、自らも元は移民でありながら彼らと自分達を差異化し、彼らを搾取しようとする白人男性優越主義の行き着く結末、即ち、活力を失ったアメリカでのアングロ・サクソン系白人男性同志の自慰行為のメタファーでもある。<sup>6</sup>

“An Ohio Pagan” の Thomas Edwards は、Wales の詩人 Twm O’r Nant (Tom of the dingle or vale) の血を引く Ohio 生まれの若者である。Wales という地名



は、古英語でアングロ・サクソン系以外を指す「異邦人」を意味する言葉に由来する。Twn O'r Nant は、音楽を愛し、且つ、体は逞しく力持ちで、正義感が強く、森の丸太を持ち上げる機械に通じてもいた。美しく繊細なものを愛する心を持つと同時に、現実の生活においても地に足の着いた人物であったと考えられる。Thomas は、幼くして孤児になりながらも、親代りでもあり雇い主でもある Harry Whitehead の元で、16 才にして繋駕競馬で記録を出し、新聞にまで載る。しかし、約束されたその輝かしい将来も、あっさり捨てる。田園風景が好きな彼は、脱穀の仕事を手伝い、馬に乗って水源まで行き、水を運ぶのが彼の仕事である。彼の雇い主 John Bottsford は、小作人として働いて貯めたお金で脱穀機を買ひ、依頼された農場で脱穀を専門に行うようになったのであり、勤勉な男である。信仰心も篤く、また、学校教育にも価値を見出ししている。彼は、19 世紀的男らしさを体現していると捉えられる。

キリストに関しほとんど何も知らない Thomas は、Bottsford の祈りの通りに雨が降ったり止んだりするのを見て、キリストを“some unknown power in nature itself” (Rideout 168) として捉え、“a young god walking about over the land” (326) として身近にいると思うようになる。彼が乗っている馬 Pegasus は、Walter B. Rideout によると、ギリシャ神話の Pegasus ではなく、*Encyclopedia Britannica* (1911) の、Pegasus を水と関連づけた伝説から Anderson が借用した可能性がある。<sup>7</sup> 水という自然の恵みをもたらす Pegasus との組合せにより、Thomas 自身も神話的レベルへと引上げられ、Ohio の自然の中を自由に歩き回るもうひとりの神という雰囲気が付与されている。神話化された Twn O'r Nant の子孫であり、自然の中に宿る神に見守られていると信じて働く Thomas を描くことにより、“Anderson demonstrates how myth, religion, nature, and the daily task flow together in the mind of this youth” (Rideout 168) と捉えられる。

その彼が、Pegasus に乗る必要が無くなると、湾、川、木々、池等がそれぞれ女性の体の一部に見えるようになり、性的夢に耽るようになる。しかし、彼は、それを忌避すべきこととして罪悪感を覚えてはいない。Thomas にあっては、現実における生活と心の内的世界が乖離してはいないのである。彼は、“Jesus, bring me a woman” (340) と祈りさえしている。Anderson は、“a concept of paganism involved a rejection of the sexual repressiveness he associated with Puritanism” (Rideout 169) と考えたのである。従って、Ohio の田園への敬虔な気持ちと豊かな夢想の世界を持って、地に足を着けて生きていくことのできる

「異教徒」に、Thomas を仕立てている。

人間の愚かしさ、残酷さに、心底、気分が悪くなった Herman Dudley は、人間と馬や他の動物とを比較して、次のように語っている。

It's something in us that wants to be big and grand and important maybe and won't let us just be, like a horse or a dog or a bird can. Let's say Pick-it-boy had won his race that day. He did that pretty often that summer. Well, he was neither proud, like I would have been in his place, or mean in one part of the inside of him either. He was just himself, doing something with a kind of simplicity. (200)

彼は、馬に、常に本来の自分であるといういい意味での単純さを見、他との関係で生きている人間が持つ欲望に、人間心理の複雑さ、奇怪さを見ている。Anderson は、ありのままの自分である素朴さに、さわやかなものを見る喜びを覚えていると考えられる。そして、この素朴さを Thomas に付与している。“An Ohio Pagan” は、Anderson による作品の欠点として指摘されている結末の曖昧さを孕んではいるが、自身にも他者にも厳しい道徳を守るよう強いる Puritan とは異なる、素朴でおおらかな異教徒的若者像を提示している。本短篇を *Horses and Men* を締め括る位置に置くことで、精神的未成熟、芸術の腐敗、偏見、孤独、暴力、貧乏、搾取が蔓延しているが、中西部における人間の未来に希望は残されていることを、Anderson は暗示している。

### Ⅲ

本短篇集のタイトル ‘Horses and Men’ の “Men” は、一義的には、「人間」と捉えられる。Anderson の言葉、“But it (being beautiful) did not suffice. Will not suffice. The horse is the horse, and we are men” (Jones 106) は、自らの生を展開していく者としての人間に、彼が意味を見い出していることを伝える。敗北しても続いて行く生の重みを受け止めているが故に、彼は人間の生を観察し考えることに、真剣に取り組んだのである。

ドイツ系移民の二世である Dreiser は、New York 湾の無人島に死体となって棄てられるような終り方はしたくないと、憑かれたように働いた。また、自分の姉が中年の妻帯者と関係を持ち、その男が雇い主の金庫から金を持ち出して

新聞種になったことから着想を得て書いた *Sister Carrie* (1900) 出版後は、不道徳作家のレッテルに苦しみ、H. L. Mencken 等の文芸批評家から、*Sister Carrie* はアメリカ初の本格的リアリズム小説であると認められるまでに、何年もかかっている (岩元 58-62; 80-87)。Anderson は、“Now I rather think—in America, at least—survival and development is largely a matter of nerve force, of survival” (Jones 112) と語っている。従って、彼は Dreiser に、重圧の元でも、心の清潔さを保って着実に生きていく忍耐力、真の男らしさを見ているのである。故に、タイトル中の “Men” は、「男」をも意味している。<sup>8</sup> 空想や想像力の持つ精神的価値を、軽視したり危険視し、他者として周縁化された人々の労働力の搾取によって殺伐とした醜悪な現実世界を作り出し、肥大化させていくアングロ・サクソン系の男達に、「男性性」の意味への問いかけを、Anderson は発しているのである。

#### 注

本稿における Anderson の作品からの引用は、*The Complete Works of Sherwood Anderson*, ed. Kichinosuke Ohashi (Kyoto: Rinsen Book Co., 1982) により、*Horses and Men* (第 X 巻) からの引用は、本文中で括弧内で頁数のみを示し、その他の作品については、巻数及び頁数は括弧に入れて示す。

- 1 プロテスタントにとって、貧しさは怠惰故であり、罪と捉えられたことを、Max Weber は、*Die Protestantische Ethik Und Der Geist Des Kapitalismus* (1920) において説明している。
- 2 Welford Dunaway Taylor は、“He has been cruelly initiated into the ways of pretense and affectation, which have wounded his simple, forthright sense of behavior” (Taylor 64) と述べている。
- 3 ホモソーシャルな関係については、『男同士の絆』(イヴ・K・セジウィック 名古屋大学出版会 2001) に詳しい。
- 4 Wei-jan Chi は “For Herman, the incident is in a sense a blessing in disguise: it forces him to confront, before it is too late, the serious consequence of excessively indulging in the imagination” (Chi 69) と述べている。
- 5 1870 年に 20 万人だった Chicago の人口は、1880 年には 50 万人、1890 年には 100 万人を超えている (佐々木・大井 2)。南欧・東欧からの移民は、「新移民」と呼ばれたが、その言葉には、宗教・宗派や言語の面で、異質の文化を持っているというニュアンスが込められていた (野村・松下 212)。

熟練技能を持たない「新移民」は、東部と中西部の工業都市や鉱山地帯で不熟練労働に従事した。地下や馬小屋、掘っ建て小屋、安アパートの一室等での重労働の後、彼らを迎えてくれるのは、工場の煙突の煙で煤けた、水道・下水設備の

ない共同住宅や、床にごこ寝せざるを得ないような一夜の宿であった（佐々木・大井 99-104; 188）。

豚の飼育で食肉産業の発達した Chicago には、缶詰工場、ソーセージ工場、肥料工場があった。Anderson は、廃屋となった屠殺場から漂ってくる悪臭によって、これらの工場に立籠める牛や豚の肉、内臓、骨、腐肉の発する臭気や、下水処理のために自然の水の流れを逆流させて造られた Chicago の運河の汚水の臭気までも暗示していると考えられる。

- 6 「人種」というのは構築された概念であり、「白人」の境界を巡る争いとその境界の揺れについては、『白人とは何か?』（藤川隆男編 刀水書房 2005）所収の「アメリカにおける白人の形成」参照。
- 7 Walter B. Rideout は次のように述べている。  
 “The erroneous derivation [of the name from the Greek word for] ‘a spring of water’ may have given birth to the legends which connect Pegasus with water; e.g. that his father was Poseidon, that he was born at the springs of Ocean, and that he had the power of making springs rise from the ground by a blow of his hoof.” (Rideout 173)
- 8 James Shevill は、Anderson は本短篇集において “Why is man in this country often so blindly aggressive? Is it because he refuses to value or understand the feminine side of his life?” と問いかけていると指摘し、“On the one side, violence, and on the other side, childish innocence, and nowhere maturity” と述べている (Shevill 189)。

#### works Cited

- Anderson, David D. “The Structure of Sherwood Anderson’s Short Story Collections.” *Midamerica*. 24 (1997): 90-98.
- Anderson, Sherwood. *Horses and Men. The Complete Works of Sherwood Anderson*. Vol. X. Kyoto: Rinsen Book Co., 1982.
- \_\_\_\_\_. “The Modern Writer.” *Sherwood Anderson’s Notebook. The Complete Works of Sherwood Anderson*. Vol. XIV.
- Chi, Wei-jan. “The Power of the Imagination in ‘The Man Who Became a Woman.’” *Fu Jen Studies*, 21 (1988): 61-72.
- Jones, Howard Mumford, and Walter B. Rideout, eds. *Letters of Sherwood Anderson*. Boston: Little, Brown and Company, 1969.
- Howe, Irving. “The Short Stories.” *Sherwood Anderson*. Ed. Walter B. Rideout. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1974.
- Rideout, Walter B. “A Borrowing From Borrow.” *Sherwood Anderson*. Eds. Hilbert H. Campbell and Charles E. Modlin. New York: Whitston Publishing Company, 1976.
- Shevill, James. *Sherwood Anderson: His Life and Work*. Denver, Colo.: U of Denver P, 1951.
- Taylor, Welford Dunaway. *Sherwood Anderson*. New York: Frederic Ungar Publishing

Co., 1977.

Sedgwick, Eve K. *English Literature and Male Homosexual Desire*. Columbia UP, 1985.

『男同士の絆』上原早苗・亀澤美由紀訳 名古屋：名古屋大学出版会，2001.

Weber, Max. *Die Protestantische Ethik Und Der Geist Des Kapitalismus*. 1920. 『プロテ

スタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳 東京：岩波書店，2001.

岩元巖『シオドア＝ドライバー』東京：清水書院，2002.

小玉亮子編『現代のエスプリ』東京：至文堂，2004 (9).

佐々木隆・大井浩二編『史料で読むアメリカ文化史3—都市産業社会の到来』

東京：東京大学出版会，2006.

野村達朗・松下洋編『19世紀民衆の世界』東京：青木書店，1993.

常松洋『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』京都：昭和堂，2006.

藤川隆男編『白人とは何か?』東京：刀水書房，2005.

